

【佳作（環境生活部長賞）】

恩返し

石巻市立石巻中学校
三年 平居明哲

十二年前の三月十一日。私の住む宮城県石巻市は未曾有の大災害に襲われました。「東日本大震災」です。私の通っていた保育園も被災し、人々の生活は一変しました。二歳だった私はその時のことをほとんど覚えていないので、母や姉に聞いてみました。

我が家は丘陵の上にあつたため無事だったこと、保育園のみんなや両親の職場の人など二十人くらいの人が我が家に避難していたこと、水がなくて困っていたこと、隣の家のおじさんが空き地の古い井戸を見つけて、みんなでその井戸からくみ上げた水を炭火で沸かして使ったこと、給水車が来るようになったことを聞いてペットボトルやタンクを持って何度も水をくみに行ったこと、十一日後に水が水道から出た時、みんなで手を叩いて喜んだことなどを知りました。今当たり前に水が手に入る生活をしている私には想像のつかない話ばかりでした。母はそれ以来、水用ペットボトルを常備し、空になったペットボトルに水道水を貯めておくようにしていると話していました。

震災の被害を受けた人の中には、今でも津波に対して憎悪をもっている人が少なからずいると思います。

しかし、この世界から水がなくなってしまうらどうなるでしょうか。人間の体の七十パーセントは水でできていて、人間は水なしでは四〜五日しか生きられないということを聞いたことがあります。つまり、改めて言うまでもなく、水なしでは地球上の全ての生物は生きていくことができないのです。

私は母や姉の話聞いてから、どこかで災害が起きたというニュースを

聞くと、真つ先に「その場所に水は届いているのだろうか」と考えるようになりました。

津波という恐ろしい一面を持つ海も、普段はたくさん恵みを育ててくれます。また海から蒸発した水蒸気は雲となり、雨として大地に降り注ぎ、大地の恵みを育ててくれます。つまり、「水はすべての生物の命の源」なのです。

日本ではこの海の恵みや大地の恵み、そして「水」が当たり前のように私たちの側にあります。しかし、世界に目を向けると、それが当たり前ではない国がたくさんあります。

ユニセフのデータによると、世界では六億六千三百万人もの人々が安心して飲める水が身近になく、三百三十万人を超える子供たちが、毎日何時間もかけて池や川、整備されていない井戸まで行って水をくんでいるそうです。さらに、汚れた水を飲むことによつて命を落としてしまう乳幼児が年間三千万人もいるというのを知り、私はショックを受け、胸が痛みました。ひとつの村に一本の水道があつて、きれいな水が使えさえすれば、どれだけ多くの命が救われることでしょうか。

二月に起きたトルコ・シリア大地震の際も、水がなくて困っている人達のニュースを見ました。生徒会執行部に所属している私は、トルコ・シリアの方々のためにかできることはないかと考え、部員とともに支援募金を呼びかけることにしました。街頭で募金箱を持って呼びかけをしていると、多くの生徒が協力してくれました。さらに、地域の方々の中にも募金してくださる方がいて、世界中からたくさんの方の支援をいただいた。東日本大震災の恩返しをしたいという石巻市の人々の思いがまった募金箱となりました。これによつてトルコ・シリアの人々に「命の水」が届くことを願っています。

世界中の全ての場所で「命の水」が使えるように、何十年、何百年先も地球が水の溢れる豊かな星であるために、限りある資源を効率よく使い、自然の恵みを大切に守っていくことが、今の私たちにできる最大の地球への恩返しだと思います。